

SMFアートボランティア講座

2010年9月19日・11月13日・2011年1月15日 埼玉県立近代美術館

〈SMFアートボランティア講座〉が下記のように3回のシリーズで開催されました。「アートに関わる」「アートを支える」ということは選り取られたひとつの生き方ですが、それを自覚して参画を促す、魅力ある開かれた場づくりが求められています。芸術活動を支援する団体・個人の育成や活動基盤の整備は、文化行政の重要な課題のひとつでもあります。

第1回「私もアートボランティアでした」9月19日 講座室

第1回は「NPO法人芸術資源開発機構 (ARDA)」副代表の村田早苗さんをお招きしました。アートの現場での豊富な経験から示唆に富むお話が次々と飛び出しました。お金を生み出せない現在のようなアートのシステムの中で「運営協力費としての(入場料)」や「レセプションで美味しい料理を作りビールを売る」、「作家も集客や経済的負担に関わる」など、川口現代美術館スタジオ[*]の運営をめぐるその試行錯誤の経験は、現代美術のライブハウスシステムの模索、あるいは非営利運営の実験としてもとても興味深いものでした。また各ボランティアの「ハブ的な役割を果たす人の重要性」、「一人ずつスカウトする」、「胃袋をつかむ」などの言葉にも実践者ならではのリアリティが感じられました。

その村田さんも「結婚して子供がいて家があって幸せなのに、何でアートやるの?」と質問された時には、思わずドキリとしたそうです。アートという創造性の発露の場、それぞれが自分自身に帰れる場を閉ざすべきではないとも答えられますが、そうすると「アートをやること」「アートに関わること」は選択されたひとつの生き方であるとも考えられます。文化を支える基盤としての人材が集まり活動を継続していくためには、アート活動が一部の専門家の特別なものではなく、一般の人にも生活実感としておもしろいと感じられることが大切でしょう。そうなった時に人が人を呼んでくるのが起こってきます。

[*]1999年3月に無期休館した齋藤記念川口現代美術館の元職員を中心に立ち上げた独立アートスペース。1999年4月～2001年3月活動



第2回「アートボランティア意見交換会」11月13日 講座室

第2回は美術館やアート系の団体などで重要な活動を支えてきたアートボランティアの方々にお集まりいただき、それぞれの活動の紹介やはじめられた経緯、活動を通じて得られた喜びやご苦労などをお話いただき、意見交換と交流の契機となりました。

「CAF.N(コンテンツボラリー・アート・フェスティバル・ネビュラ)」の顧問として、また埼玉県立近代美術館の友の会[fam.s(ファミス)]の理事として、アーティストによる国際交流、芸術普及から美術館支援まで多方面にご活躍の丹下尤子さんからは、「自発性・無償性・社会性・先見性」というボランティアの特性を振り返りながら、ご自身の活動をご紹介いただきました。

埼玉県立近代美術館サポーター(常設展ガイドボランティア)として長年活躍されている菅原義之さん、岡田香緒里さんからは「楽しい時間を過ごしてもらえように」、「押しつけがましくならないように」など展示室のお客様と向き合う際の細やかな気配りについてうかがいました。

別所沼公園に建てられた詩人・立原道造の夢の結晶「ヒアシンスハウス」のハウスガイドをなさっている吉里睦子さん、眞喜志愛子さんは他のガイドの方々と交代で、雨の日も風の日も特徴のある大きな窓を通してハウスに光を導き、訪れる人にソフトに対応されています。この小さな小屋を目標に、遠方から電車を乗りついで訪れる方もいらっしゃるそうです。

さまざまなアート活動が多くある素敵な方々に支えられて存続していることを知るよい機会でした。

第3回「アートボランティアが楽しくなる七つのコツ」1月15日 講座室

第3回は美術家で美術教師の木谷安憲さん



を講師に迎えて開かれました。講師自身のユニークな活動について映像を交えてお話をうかがった後、参加者も簡潔に自己紹介をおこない、続いて木谷さんの巧みな進行で対話を重ねながら「アートボランティアが楽しくなる七つのコツ」について一緒に考えていきました。

「人とのお会いを大切に、しっかりコミュニケーションを図る。普段とは違う視点で考えてみる。そのためにはどんなことに留意すべきか?」、講師からはこの問いかけに対する次の6項目が投げかけられ、参加者がそれぞれに実践について自問しつつ発表しました。「①自己紹介に気持ちを入れる」「②情報として受け止めないで味わってみる」「③キーワードを自分なりに定義してみる」「④相手の現実を受け入れる」「⑤逆の立場から話してみる」「⑥何度も見るものをひとつ作っておく」、そして最後の7番目はみなさんで考えてくださいということになり、「⑦考えることを楽しむ/仲間をつくる/自分と向き合う/ひとひねりを楽しむ……」など、さまざまな意見が交わされました。アートボランティアに限らず、いろいろな応用できそうな楽しいお話でした。

SMFアート井戸端かいぎ 講座室



2010年8月から、原則として偶数月の第一日曜日の午後、SMFの運営委員・協力委員が中心となって気ままなアートのよもやま話の場を設けています。どなたでもご参加いただけますのでSMFのホームページなどで確認の上、どうぞお気軽にご参加ください。

中村誠(SMF事務局)



アートピクニック:北本再発見!

2010年10月10日

10月10日、前日までの雨も上がり爽やかな秋晴れの空の下、〈アートピクニック:北本再発見! Re-discover KITAMOTO〉が開催されました。当日は「日本文化デザイン会議」というイベントの開催中で、その会場でもあるさまざまな「物件」を見て回る「北本まちのコンバージョンおもしろ不動産ツアー」をおこないました。「おもしろ不動産」とは、使われていない不動産物件や公共の施設、道、森、川などを何かおもしろい活動によって新しい活用の発見につなげようという試みで、地元で活動する人たちにキタミン・ラボ舎が主催として加わり一緒に展開しているものです。今回のツアーにはナビゲーターとして東京藝術大学音楽環境創造科教授の熊倉純子さんをお迎えし、参加者と一緒にチャーターバスでまちを巡りました。

最初は「氷室(MURO)×西尾美也」へ。元氷室を改装したこの物件では、アーティスト西尾美也さんの「OVERALLプロジェクト」の展示や販売がおこなわれていました。古着のPATCHワークでつながりと再生を象徴す



るOVERALLプロジェクトは北本を含め、さまざまな地域で展開されてきました。今回は、過去の作品が再び服に作り替えられ展示・販売されていました。ツアーのみなさんは、色とりどりの服と氷室の空間を楽しんでいました。MUROでは今後も使用者を募集中です。

次の「西高尾の空き家×ORERA」では、ORERA(京造形芸術大学1年生有志)提案の「家を人の手で持ち上げる」という前代未聞の改装アイデアの実現に向けて突貫工事中でした。ツアー参加者からの「この後に誰かが住むの?」との質問に、ORERAは「持ち上げた人の中から希望者がでるといい」と答えていました。翌日の持ち上げ本番には200名以上の人が集まり、見事家が地面から持ち上がり大成功&大歓声でした。



ヤノギャラリー」として生まれ変わり、盆栽展を開催中でした。お茶会などの企画予定もあるそうです。元いも畑には、木炭や石でカーペットがつけられていました。鈴虫の声に包まれた会場で、北本の素敵な時間を満喫していただきました。



続いて北本団地の「団地105×はみ出し探検隊」へ。団地の商店105号室では、団地の小学生のアイデア「船をつかって無人島に行く」を実現すべく結成された「はみ出し探検隊」の本拠地と活動を公開。すでに、団地のお祭り広場に港から船を運び入れて制作中でした。小学生とお手伝いの大人たちは4月の出港に向けて準備を進めています。

ついで同じ団地商店の並びにある「団地102×北澤潤」のリビングルームへ。商店の一角で営まれている「居間」の内装は、まちを巡り、人と出会って集めた家具によって構成され、訪れる人との物々交換を通して変化し続けています。小中学生などが放課後に遊びに来たり、近所の方が花を持ってきたりなどして団地の人の憩いの場になっていました。今後は、団地住民によるコンサートやレストランなどが開かれるそうです。

団地を離れ、「古びた納屋 小泉雅生、猪熊純、首都大学プロジェクトチームA+Sa」と「森のいも畑×中央アーキ」へ。森に隣接した一軒家にある納屋を小泉アトリエの小泉雅生と首都大学の猪熊純のチームが改装し、隣接の畑を中央アーキが着工。納屋は、「ナ



ツアー最後の「自然教育園×宮本佳明+dot architect+垣内光司」では地元の幼稚園の施設を、建築家三者の提案により森を贅沢に楽しむ空間へと変化させていました。普段は園児が遊ぶ森に「森のレストラン」が限定オープン。ハンモック、ブランコ、藁の大きなベッド、焚き火、カフェもあります。昼下がりには「こもれび音楽会」のライブ、夕方は「すずむしキネマ」(映画上映会)も開催されていました。ここでツアーは解散となり、みなさんには思い思いに森を楽しんでいただきました。

ツアー参加のみなさんからは、「おもしろい建物、団地、自然などのいろいろな風景が見られ、参加してよかった」、「作品ではない建物も気になった」、「雑木林、団地ともおもしろかった」、「アートがまちづくりにつながっていると感じた」、「気持ちのいいツアーでした」などの感想をいただきました。今回のツアーを通して、東京から車で45分程の郊外都市である北本のまちが少しずつ変化し始めていることを実感できました。ツアーに参加できなかった方も、ぜひ一度北本のまちに遊びにいらしてください。きっと「おもしろい」があなたを待っています。

上原祥吾(SMF協力委員)

